



中川愛水著



イラユニ僧イ



中川文林堂發行



卷首の言



東大寺の暮の鐘は、二千年の餘韻を保ち、正教會の曉鐘は、今いつまにか聲をひろめし。齊しき物の響きをなす。心かな、日本正教會主教ニコライ氏は、塵外に超然として神の福音を傳へ、宗教界の大立者として、其名を世界に馳せたる偉僧なり。然るに一朝懲露の軍起るや、氏が敵國に生れたる人なるを以て、愛憎の念の之に及べるは、まだしも、氏が宣教以外に怪腕を揮ひ、我帝國に禍を與ふるものゝ如く誤解するものあるに至つては、寧ろ噴飯の沙汰と謂ふべし。予は耶蘇教を信するものにあらず。露西亞人を喜ぶものにあらず。正

明治  
27 9 22  
内交

教會の鐘の五月蠅からぬものにあらずされ予の生前十餘年早くも日本を愛する人となり日本同胞の爲に己が信ずる教理を説き萬難を排して素志を貫徹せられたる、主教ニコライ氏の熱誠と其の高徳を敬慕するものにて、我邦現時の宗教界に擲身の事多きを以て殊に此感を深うす。友人石川喜三郎君多年職を日本正教會に奉ずるを以て、氏に就て聞く所多く、此の小冊子を綴る事を得たり。唯恐らくは予が不文、この不世出の偉僧を小にせんことを、

明治三十七年八月下旬

中川愛氷識

偉僧ニコライ

目次

其一	ニコライの幼時と其の家庭……………	一
其二	少年及青年時代のニコライ……………	一三
其三	大學生としてのニコライ……………	一六
其四	ニコライの日本傳道志願……………	二四
其五	ニコライ出家して修士となる……………	三四
其六	四拾有餘年前にニコライの西比利亞横斷旅行……………	四〇
其七	ニコライ日本の函館に來着す……………	四四
其八	ニコライと維新の革命……………	五四
其九	主教ニコライの事業……………	六〇
其十	ニコライの日本化……………	六四

其十一 ニコライ主教の日本の國體に對する見解…… 六七

其十二 日露戦争とニコライ主教……… 七二

# 偉僧ニコライ

中川愛氷著

## (一) ニコライの幼時と其家庭

渺茫たる平野幾千里若しりれ白雪皚々たる銀世界を現出せば乾坤只  
 是れ氷雪熱無く血無く生氣長へに消えたる如き者は是れ實に露國の冬  
 景に非ずや坤輿一轉春風長江を渡り處女林の南枝を撫じオルガの清  
 流水白くアルタイの長嶺眺め緑に萬里の田野麥漸々として芳草綠翠  
 新に蝶舞ひ鳥歌ふの天地は皆是れ情熱復活の生氣長久に消えざる如  
 き者は是れ實に露國の春色に非ずや。

露國の矛盾反對の時候冬と春是れ實に露國の死と生とを意味し情と  
 無情博愛と冷酷とを表象せる露國自然界の根本矛盾にして此の矛盾

二  
や、亦是れ露國の人事凡百の性情事態の矛盾を譬喩するの現象ならざらんや、能く露國の自然を識り、スラヴ人種の性情を解せる者は必ず言はん、露國能く矛盾せる天才を出すも、博愛の仁君大候ウラデミルの如きあれば、殘忍酷薄なる露帝イオアンあり、献身愛他の道義の傳道者レオ、トルストイと併びて、放縱浪遊の挑發者たるマキシム、ゴトルキイあり、謙讓堯舜の如きフェオドル帝と前後して、帝位篡奪の賊臣ボリス、ゴトノフあり、之を一個人に觀るも、其性情の前後同じからず、表裏均しからず、始終一ならざる者、是れ露國の特質に非ずや、其冷かなるや、水の如くなるも、若し一次熱せば、烈火焔熱觸るる者を爛殺すべく、爛々たるラバ若し一次冷却せば、只是れ死せる一塊の土石に過ぎざる如き矛盾の性質を併有する者、是れスラヴ民族の性情に非ずや。  
日本正教會主教ニコライは、露國の國情と矛盾し、露國現代の多くの人物と正反對の性質を有する、最も不思議なる偉人なり。吞噬飽く無き驚

鳥の如き露國が、其國情と全然矛盾せるトルストイを出せるさへ、不思議なるに、自ら信する宗教傳道の爲、殆んど國を忘れ、一身を犠牲に供するの、鐵石の決意を以て、敵國の保護に信頼し、福音の傳道を任する彼が如き偉丈夫を出せるもの、是れ實に矛盾の最も甚だしき者に非ずや。  
主教ニコライは、一千八百三十六年を以て、露國スモレンスク縣の一寒村ベリヨザ村に生る。其父は同村聖堂附の下級聖職カサントキン、テミトリイと云ひ、家道豊かならずと雖も、父は清廉寡慾の人にて、農民信徒みな其徳に懐き、一家敬神愛民を心として、家庭の團樂羨望に堪へざる者あり。ニコライ其幼名をイオアンといふ、幼時資性豪邁にして、能く學び能く遊び、時に拳闘蹴撃の暴行を演じて、家人の心を痛むる事あれば、又磊落剽輕の戲傍人をして、解頤失笑せしめ、能く家人を慰むることあり。彼の家は村落聖堂の近傍にありしかば、彼は其父と共に朝夕聖堂に入りて、焼香點燈の雜役を助け、村童の一群に交はりて、讚美歌を唱せ

り其屋外に在るや、犬豚牛馬を牧する村童に交はり、犬の如くに走り、豚の如くに穢れ、牛の如くに飲み、馬の如くに食ひ、又御すべからざる腕白小僧のニコライは、一度その聖堂に入るや、彼は常に何ものかに怯るゝ如く、身を踏め、足を踏め、聲を小にして、屋外の元氣と亂暴と其影を潜めて、又別人を見るが如き者あり、彼は日曜日と祭日の祈禱會には勿論、村内の冠婚葬祭の祈禱執行毎に、其父と共に、その式に加はり、年中一度も欠きし事なかりしかば、聖堂の讀經讚美歌一として、諳せざるなく、又幼にして既に教會祈禱の儀式の順序に通じ、彼が父さへも其強記を讚美する事間々ありき。

露國にては一般正教の會風として、聖堂に於て死人の命日に供養の祈禱を行ふ毎に、麥又は米を炊きたる物に、砂糖或は蜜を混ぜ、神前に之を供へて、死人の記憶祭を行ふの風あり、祈禱の式終るや、參拜者みな此の糖飯を分ちて、死人の記憶をなすを常とす。幼童ニコライ此の糖飯を好

むこと、蟻の砂糖に於る如く、聖堂にパニヒダ(死人の記憶の祈り)あるや、彼必ず聖堂に在り、彼が白熊の子の如き茶金色の大頭を振りながら、大なる掌を無邪氣に差し、のべて、一塊の糖飯を手にし、満面喜悅の笑を漾へたる神使の如き顔容は、其母親をして必ず抱き揚げて接吻せしめたり。

彼が家には一般露國の民家の如くに、家の片隅に煖爐の設ありて、其煖爐の上は優に寢床を設くるに足れり。この最も奇妙なる煖爐附の寢臺は、是れ茶道具自沸鐘と共に、露國の一名物なり。雪の夜霜の朝若し此の無格構なる煖爐に樺の枝松の梢を焚きて、其煖爐上の寢臺に臥さば、又冬の寒さを識らざる可し。終日雪投、氷滑りに雪中を狗兒の如くに遊び、太く疲勞せるニコライは、或夜家人より先に例の煖爐の上なる寢臺に臥したり。終日の遊びに疲れて、前後も知らずに臥したるニコライは、煖爐の上にて寐轉をなし

たるに、彼の身體は煖爐の上より、狗兒を轉落したる如く石疊の上に落ちたり。一家團欒、自沸鐘を圍みて、冬の夜長の徒然を慰むる清話に餘念なかりし家人は、皆驚きてニコライの身邊に駈寄り、母は直に彼を抱き揚げたり。家人皆思へらく、高き煖爐の上より石疊の床上に轉落したれば、必ずや其身體に重傷を負ひたるならん。母の手に抱き揚げられたるニコライは、少しも泣聲を出さず、又眼をも開かず、家人は更に驚けり、母は泣けり。父は胸に手を當てて十字の記號を劃せり。家人皆聲を出して言合したる如くに、『神よ憐れよ』と祈りたり。

ニコライは母の手に抱かれしまゝ、聲なく音なく、眼をも開かざるなり。家人が水よ薬よと周章て居る間に、父母は彼の顔を熟視し、額を撫し、呼吸に注意せしが、彼等の驚きは更に變じて怪訝となれり。何とされば石疊の上に轉落して、熟したる林檎の如く軟弱なる身を打ちたるニコライは、必定腦振蕩を起して昏倒氣絶せるものと思ひしなり。然るに石の上

に墜落したる彼は死したるに非ず、氣絶したるに非ず、安らかに最心地よげに野聲高く熟睡し居たるなりき。氣絶して死したりと思ひし愛兒は、夢圓かに安眠し居る者なるを識りたる父母の喜悦や如何なりけん。母は其嬉さゝへ胸に餘りて再び涙にくれたり。父なる輔祭は感謝の心に満てられて、其胸中に『神を讃揚す』と祈りたり。彼は安眠せり。些の怪我だも無しと聞きたる家人は、口々にイアン(ニコライの幼名イオアンの略音にて、愛して呼ぶ時に斯くいふ)を呼びながら彼の邊りに集りたり。人々が喜びの餘りに大聲に談話し、頻りにイアンくと呼びしかば、彼は母の膝に抱かれながら圓かなる愛くるしき兩眼をひらきて、不思議げに人々の顔を眺め、再び睡りて翌朝まで常の如く安眠し、翌日も例の如く雪中に駈け廻りて遊び暮せり。家人はニコライ生長の後までも、此の日を記憶して子供を守る『守護神使』の日となして、年々感謝の祈りを献げ、親戚知人を會して、此の日を祝せ

り。  
 二千八百四十年前後のロシアは、内憂外患相繼ぎ、世は所謂戦國の時代ともいふ可き年代なり。國民舉つて奉公忠勇の義心を喚起し、スコペレフ將軍の英名尙ほ人口に膾炙せられ、カザツク騎兵の武勇談に『神の爲皇帝の爲』の愛國心を慰むる時代なりしかば、村童の遊戯は戦ごつこならざるは無かりき。或は雪中に友を追ひて佛軍大敗の狀に擬し、或は竹馬の列をなしてカザツク兵進軍の勇を似ね、村童の遊戯は能く國民の當時の性情を表示せり。天資豪宕の幼童ニコライは斯る遊戯には何時も一方の餓鬼大將として、村内には其膽力と腕力とを以て亦彼に敵する者なかりき。されど彼の父は敬虔なる宗教家なりしを以て、ニコライの斯の如き遊戯を爲すを喜ばず、彼が物心の附きし頃より彼の父はかゝる遊戯を嚴禁せり。されど其心身精力充滿元氣旺盛の少年は、又必ず適當の遊戯なくして満足するを得べきに非ざりき。父より粗暴なる

遊戯を禁ぜられたるニコライは、村童を集め、自ら異様の布片を身に纏ひ手に竹木を持して、十字架と蠟燭とに擬して、日々祈禱の遊びをなすに至れり。彼は門前の小僧として能く習はぬ經を諳んじ、祈禱の順序を記し、時としては數十人の村童の列を作りて、十字行の似ねをなせり。彼が村里の小學校に在るの際、其勉強力と強記とを以て教師を驚かまたる事一再に止らざりき。彼は幼年の時一度學びたる地人名の如きは、未だ曾て忘れたる事なく、舊約聖書の歴史談の如きは、幼時既に其大體に通じ、小學校に入りて後は、舊約聖書と新約聖書の史談一として精通せざる無く、尋常中學の課程に入りて學ぶ可き歴史地理數學等を、彼は能く小學校に於て何の苦もなく之を獨習精通するに至れり。  
 ニコライが村内の小學教育を終へて、是より中學の課程に移らんとする際に、彼は幼年の宿望なる軍人たらんとするの決心をなせり。ロシア當時の如き時代に在りて、有爲の少年が軍人たらんと希望を懐くが



如きは元より當然たりしなり。今日世界の非戦主義の主唱者と稱せられ、絶對的に戦争を否定するトルストイ伯さへも、殆んどニコライと同時代の少年の時には自ら進みて軍事教育を受け、久しく士官となりて奉職し、戦場に出でし事さへもあり、されば満身是れ膽力ともいふ可き一少年ニコライが、其性質より軍人たらん事を希望するが如きは寧ろ自然の事のみ。然るに彼が父は敬虔篤信にして温厚なる宗教家たるを以て、其子が軍人たらん事を希望するを、恰も何等かの悪事にても希望する者の如く感じ、ニコライの希望を喜ばざりき。少年ニコライが優等の成績を得て、其村の小學校を卒業するや、彼は直に一身の方向を定め、何れかの専門學校に入學せざるを得ざる場合となれり。是れ當時のロシアの教育には我が今日の尋常中學校の如き普通科の中學校程度の學校としては無く、小學校を卒業したる者は直に各種の専門中學校に於て教育を受く可き順序なりしを以てなり。

さればニコライは小學校を卒業するや、彼は兼ての希望を断行せんと欲して、其父に兵學校の豫備教育を受けん事を願ひたり。其子の性質と平素の言行よりして、既に其希望を察知せる彼の父は、軍人たる事を断念して、宗教家たらん事を勧告せり。是れ彼の父は篤信敬虔なる宗教家たるを以て、世には如何なる尊貴の職務ありとも、一身を宗教事業の爲に献げ、神の福音を傳へ、萬民救済の教道を宣傳する聖職程貴き人生の事業なきを信じたればなり。彼の父が宗教家たらんことを勧告じ且つ希望する言は甚だ切なりき。彼の父は假令我子と雖決して其意を強ひて我が意に従はしむるを得ざるを知れり。故に彼の父はニコライに宗教家たらんことを勧告希望して、其切なる父としての温愛指導の言をなしたるも、少しも彼を強ひざりき。又其言は少しも命令的ならざりき。然るに其資性甚だ孝順にして感情の鋭きニコライは、大に其父の言に感じ、且つ平素の父の己に對する指導に考へ、又自己の良心に問ひて、彼

は軍人たらん事を断念せり而して終生宗教家を以て任す可しとの決心をなせり。

彼ニコライの父が其子の軍人たらんことを望まざりしは他に一の理由ありき其子を識る父に若くはなし彼の父を以てニコライを見る時は彼は實に一個の爆烈彈の如くにて最も危険なる資性を供へたり少年ニコライは其意志の剛毅なる殆んど頑強に近きものありて彼が一度意を決して其所思を断行するや奮勵敢爲其目的を遂げざれば未だ會て止まず故に斯の如き資性を以て軍人とならば或は國家の爲に多少の貢献する所ある可きも彼ニコライの一身の徳義上に取りては危険なるもの無きに非ず彼の資性豪放磊落の者若し當時の軍人社會に一身を投せば意氣の豪壯は小徳を輕んじ遂に如何なる徳義上の墮落に陥るやも期す可らず父として子を愛する情若し眞摯なるものありとせば其子をして光榮なる玉碧となりて瑕疵あらしめんよりも寧ろ

無名の瓦石となりて其徳を全うせん事を願ふの情の如く切なるは無かる可し即ち彼の父は其子の名譽ある軍人となりて徳義上の墮落者たらん事を願はず寧ろ宗教家となり名譽と榮華との外に立ちて徳義界の事業家たらん事を望みしなり孝順にして温良なる子は慈父の希望の如く終生宗教家として神の爲に働き聖業の爲に一身を致さんとするの決心を父に告げ其父を喜はし自らも亦將來の深き高き希望を以て其意を満したり。

(二) 少年及び青年時代のニコライ

幼名イオアンのニコライは自らも大に決心して宗教家たらんとの希望を懐きて其父母兄弟姉妹に別を告げて遠く帝都に出で神學中學校に入學せり此の時より彼の性質は一變し豪放磊落の客氣は少年の腦中に消れて謹嚴剛直の少年とされりされど彼の活潑元氣にして恰

も悍馬の如き性質は、少しも變せず、身體の成長と共に、英風秀儁の氣才と併せて、益々其活潑の度を増せり。

彼の神學中學校に於ける修學の進歩は、元より尋常に非ざりき。彼は驚く可き記憶力を以て、神學校の課程を修めしかば、當時一切の學科を諳記法を以て學習せしめたる學校の事なれば、同級生中には一人として彼に匹敵すべき少年あらざりき。神學校の課目は、地理、歴史、物理等の普通科の外に、哲學、論理、宗教、哲學、比較神學、其他十數の課目ありて、學年は七八年の長きに亘れり。其課目中にありて、特に衆生徒の難しとする所は、グレイキ語とラテン語是なりき。此の二古語は神學研究の一大關鍵にして、グレイキ語とラテンの古語に通せざる者は、未だ以て神學の堂奥を窺ひし者に非ず。

然るに篤學強記のニコライは、特に好みて衆生徒の難課とするグレイキ語、ラテンの古語研究に熱心し、語學に於ても、級中彼に比肩する者一人

もあらざりき。彼が神學校に於ける新語學の研究は、重に獨逸語にして、英語は少しも修めず、傍ら佛語を修めたり。彼の得意とする所は、グレイキ語と獨逸語にて、彼はグレイキ語を關鍵となして、東方教會歴代の聖師父の古典を研究して、神學の精粹を窺ひ、獨逸語とラテン語とを以て、中世紀より近代に於ける歐洲の哲學思想の淵源を究めんとせり。而して彼の一生は、實に此の希望の一條の軌道を直進せるものに過ぎず。

彼の神學中學校に於ける生活は、一言以て之を盡せば、謹嚴精勵の生活なりき。彼が唯り同學の生徒のみならず、神學教授の間にも、重きを置かれしは、常に學問の好成績に由りしのみならず、其素行の謹嚴なるに在りき。彼は自ら己を持する謹嚴なりと雖、元氣充實して、其舉止に現るゝ行動は、甚だ活潑にして、曾て靜坐して、友と語るといふ如き事なく、彼の身體は何時も安靜なる態を有せざりき。

故に學校の講堂に在りて、教師の前に坐するも、彼の筋肉は常に動き、鉛

筆を持して教師の講義を筆記するに非ざれば肩を動かして手を苦にし、自ら其座に堪へざるが如きものありき然も彼の精密なる注意と理解力とは其が爲に妨げらるゝ事なく教師の講義説明等が、一々其心に感銘する毎に、又其疑義を理解する毎に、彼は何時も其大なる頭を前後左右に動かして、首肯服承するの状を表せり。是れ自ら求めて斯の如き舉止を爲すに非ずして、彼が身體に充滿せる精力は自ら發露して斯の如くならしめしのみ。ニコライは神學中學校も、最優等の成績を以て卒業し、得業者中より特に選拔せられて、神學大學校に入學せしめられたり。

(三) 大學生としてのニコライ

カサットキン、イオアンの俗稱を有したりし大學生としてのニコライは、實に當年のペラルポルグ神學大學校生徒の冠冕なりき。彼は中學生より大學生に進み、其素行は更に一層の謹厚を加へ、日夜哲學、神學、歴史

の研究に精勵し、學業日々に進みたり。神學大學校の課目は、決して容易なる課目に非ず。そが一般を列記すれば、哲學史、論理學、心理學、宗教哲學、比較神學、教會史、世界史、說教學、舊新約聖書講明、露國教會史、定理神學、倫理神學、グレイキ語、ラテン語、獨佛語等、其他數種の課目ありて、聖書講明のみにて、殆んど數科に別れ、之を學習する決して容易に非ず。然れども篤學精悍なるニコライの爲には、多くの學科を眞面目に研究するも、尙時間に餘りありき。彼は學校科目を研究して餘りたる時間を、常に圖書館内の研究室に送れり。

彼が大學に在在校の際、その圖書館に於て研究したるは、上下一千七八百年間に亘るグレイキ、ロマの所謂著名なる聖師父の著作、幾千百部の名著、これなり。彼が其名著中に特に精讀せる聖師父の著書は、聖金口イオアン、聖大ワシリイ、神學者グリゴリイ、聖キリル等の著にして、自ら私淑せる所の宗教家は、大説家として著名なる金口イオアンなりき。

ニコライは勸學精勵寸分の時間だに空費することなかりしと雖、大學生としての彼は決して隠遁者風の學生に非ざりき。彼は徳義上己を責むる甚だ嚴なりと雖、自己の品位品行を害せざる限りは、又よく友と交はりて善ありき。彼は友と相會して清筵に酒を飲み、相樂むを辭せざりき。彼は夜會に臨み、舞蹈する事をも辭せざりき。故に大學生時代のニコライは、隱君子然たるニコライに非ずして、酒も飲み、舞踏もし、能く學び、能く遊ぶ、一般普通の學生に過ぎざりき。されど彼の徳義の高尙森嚴なるに至りては、決して一般學生と同視す可からざるものありき。今尙當時在學せる古老の聖職學者間に記憶せらるる左の逸事の如きは、以て當年の大學生としてのニコライを想見するに足るべし。

神學大學校の生徒は皆寄宿に在りて、學校の監督を受けざる可らず。學校制度は斯の如くなるも、大學生は中學程度の生徒の如くに、敢て嚴重なる監督を受くるに非ず。大學生は社會よりも既に紳士として待遇せ

らるるを以て、學校も亦出來得るだけ生徒に自由を與へて、敢て子供に對する如き待遇をなさず。神學大學生は悉く皆學校内の寄宿舎に在るも、紳士として待遇せらるるを以て、學校の出入門限の如きも、充分に猶豫を與へられ、生徒と雖、市中の知人親戚等の催せる夜會に臨むが如きは、普通のことなり。されど素より堂々たる大學の寄宿舎なるを以て、如何に自由なりとも、無制限の自由を與ふるに非ず。時間に猶豫あるも、一定の門限ありて、紳士としての大學生は、自己の品位に問うて自ら此の門限を犯す者あらず。即ち學生自主自治の精神は、自ら學校の規律となりて、風紀甚だ嚴なるものあり。

然りと雖、數百名の神學大學生悉く皆品行方正なるに非ず。神學大學生は卒業後皆何れも相當なる高等聖職に就任すべき候補者なるも、中には放蕩無頼の學生も無きに非ず。特に大學生の一大惡弊は、飲酒の風甚だ盛んなることなり。大學に於て規則を以て飲酒を取締らざるに非ざ

るも既に大學生を紳士として待遇する以上は又多少の寛大なる取締も必要なり。故に多くの場合に於ては學生の飲酒は默許せられ、校規亦飲酒を以て重き罪として問はざるの風あり。

ニコライ在學の當時、或夜一人の大學生甚だしく門限を遅刻して歸來し、剩へ酩酊して校門の看守に亂暴を加へ、神學大學生として有る可らざるの暴行を爲せる者あり。其翌日に至りて、此の事全校生徒の知る所となり、其亂暴者の姓名さへも明かになれり。此の事實を知りたる同學生のニコライは、是を以て大學生の面目を損じ、大學の名譽を害したるものとなして、大に憤慨し、彼は敢て他の生徒に謀る事なく、自ら大學總理の許に至れり。彼大學總理に面し、辭色謹嚴陳じて曰く、近來當神學大學生徒の信仰の冷却、品行の放縱實に嘆ず可きもの少々に非ず。神學大學は露國の最高聖職を養成する中府たるに、其風紀斯の如きものありては、國家の爲、教會の爲に慨嘆に堪へざるものあり。校規の勵行、風紀の

刷新に就きては、總理に於て既に高見の存する事を信ず。然るに既に總理の詳悉せらるる昨宵に於ける生徒某の行爲の如きは、實に當神學大學の名譽に關する事件にて、若し當校が斯の如き者に對して、寛大の處分をせられんか、全校生徒の風紀益々亂れ、學生の徳風を墮落する一層甚だしき者あらん。某一人の退學の運命、甚だ憐憫に堪へざる者なきに非ざるも、願くは一校の名譽と全校生徒の徳風刷新の爲に、涙を飲みて馬稷を斬るの斷然たる處分を執行せられ、某をして即時退學せしめられん事を望む。大學總理は著名の主教にて、温厚の耆碩なりしかば、ニコライの言を傾聴し、尙一考すべしと告げて彼を歸せり。

大學の總理はニコライの言に重きを置き、一生徒の提言と雖、苟も全校將來の風紀に關する事なるを以て、直に大學教授の評議會を開き、此の件を評議に附したり。大學の教授會はニコライの提言を以て當然の事なるを認めたるも、退

學處分を受く可き學生も、亦將來望み無き學生に非ず、特に其品行に於て遺憾の點なきに非ざるも、學業成績に至りては、優等の席に居る者なれば、教授會は其處分問題に關して頗る苦む所ありたり。時に神學大學の老總理は、會議の席に告げて曰く、ニコライの提言我等皆りの意を諒し、彼に對しては大學の爲に此の忠言を進めたるを謝さん。然れども、退學處分に相當せる學生某は學業優等の成績を有する者なるを以て、大學は彼に向ひて反省改心を促し、禁足の處分を以て罰す可し。又ニコライに對しては、余總理の職を以て、本校を代表して彼に謝し、且つ彼を推選して、特に同寮の監督生たらしむ可しと、滿場異議なく總理の意見に賛成せり。老總理は先づニコライを招きて、彼の忠告を謝し、亂暴學生に退學を命ずべき處なるも、大學も亦多少彼に望を屬せざるに非ざれば、寛大の處分をなす事に決したる旨を告げたり。ニコライも亦今回限り寛大の處分をなさんも可なるべしと言ひて、總理の言に従ひたり。此の

始末を傳聞したる數百の大學生は、學生間に大學總理よりも嚴格なる一學生あることを識りて、風紀忽ちにして改まり、全校生徒はニコライを見て襟を正うせざる者無きに至れり。此の時退學の處分をせられんとしたる學生は、後來深く改心して品行方正の生徒となりて、優等の成績を以て大學を卒業し、後に顯著なる位置を占むる人となり、自ら當年の事を廻想して、ニコライを徳とせりと言ふ。

學生としてのニコライは、全校の畏敬する所となり、又其學業成績到底他生徒の及ぶ所に非ざりしを以て、彼は大學卒業後總理の命に依りて學校に止まり、學生の監督を命せられたり。是れ素より大學出身者たるニコライに對する正式の任命に非ざりしも、總理は斯の如き人物を平凡の僧侶職若くは中學教師の如き者に任用するを欲せざりしなり。ニコライも亦敢て急かに職を奉ずるの必要をも感せざりしかば、彼は暫く大學に止まり、尙研修を積み、心膽を練りて、將來に備ふる所あらんと

せり。

(四) ニコライの日本傳道志願

斯くて大學に止まり、學生監督の任を命せられたるニコライは、日夜大學の圖書館に入りて、古今の名著を閲讀し、學殖大に進み、大學總理を始め、教授の職員は、皆何れもニコライを以て大學教授の任に當らしめんと、その協議に賛同し、ニコライは教授の候補者として待遇せられたり。されど、彼は大學教授の職の重きを識り、又其榮職の社會を益するの大なるものあるを認めざるに非ざるも、大學教授の職は、彼が性質に適したる唯一の職に非ざる事を感じ、若し他に自ら好む所の職なくんば、詮方なきも、彼が心中には到底他の名譽と榮職とを以て換ふ可らざるの希望の存することを自覺せり。

神學士ニコライは大學教授の榮職も敢て貴しとせず、又最高位の僧侶

職たる主教の職も自ら欲する所に非ず、彼は露國に在りて國教々會の範圍内に在りて奉ずるを得べき、一切の職務は一も己を満足せしむる者無きを自覺せり、彼は古代教會の聖師父等が異教民を教化して、基督教に導きたる歴史を讀み、又深く基督を其門徒等が傳道の爲に苦心したる經歷を考へ、若し世に宗教家として立たば、國教々會に衣食して、信徒を教養する教職たらんよりも、世界の異教國に赴き、未だ基督教を奉ぜざる人民に、基督教を傳ふる使徒職より好ましき職なきを認めたり。彼は密かに決心する所ありしかば、世界各國の異教民中に、自己の傳道地を選ばんが爲に、各國の風土誌若くは旅行紀等を涉獵せり。一日彼は大學の圖書館に入りて、群書を讀み居りたる際、偶然手に觸れたる一珍書ありき。今より六七十年前に、露國の一商人日本の北海道近海に航行し來り、乗船難破して北海道に上陸し、官民の厚き保護を受け、滞在數年の後、便船を以て露國に送還せられたるものあり。此の商人はゴロウニ



ンと言ひ、多少學識もある人物なりしかば、日本に滞在中深く民情國俗は勿論制度文物商工業の事を觀察し、歸國の後一書を著せり、其書名を『日本幽囚日誌』といふ。ニコライは偶然此の日誌を讀みて、始めて日本帝國の事を識り、日本の山川風土を想像し、其民俗の温厚質朴なる性質を念ひ、若し天彼の希望を許し給はば、彼は基督教傳道の良田、この日本國の上に出るものなきを認めたり。此の時より彼の心中にはゴロウニンの日誌にて讀みたる山紫水明の日本の風景は、常に勞瘁として其想像に浮び、日本國民の温良勤勉にして、謙讓友愛に富みたる性質は、彼の心中に深く好愛尊敬する所となり、忘れんとして忘る能はざるに至れり。

斯の如く彼は基督教宣教の傳道地として、其心中に日本帝國を選定したるも、如何にして傳道の事業を開始すべきやを自らも識らず、又之を其親友にも謀らざりしかば、彼は日本傳道の空想を懷き、自ら其空想に

耽るを以て唯一の樂みなしたり。

然るに一千八百五十四年即ち我が安政元年に米國と露國とは列國に卒先して日本と通商を開き、安政六年には通商條約を結び、露國は其前に既に函館の互市場に領事館を置きたり、露國政府の官制中には、外國駐劄の領事館には、館員に宗教の制規を守らしむるが爲に、一名の僧侶を置くの規定あり、當時始めて函館に領事館を設けたる際に、一名の司祭を置きたりしも、疾病の爲に歸國して、領事館附僧侶の缺員を來したり。茲に於て、露國政府は更に後任の僧侶を遣はさんが爲に、其候補者選定を大學に委託せしかば、神學大學校總理は、趣意を認めて校中に回達し、希望者は記名すべき事を命じたり。

或日曜日朝のことなりき、天朗かに氣澄み、大學の庭前に啼鳥を聞き、草樹の朝露旭日に映じて麗はしく、神氣爽快を感ぜしめ、日曜日の禮拜祈禱式了らば、即ち運動に出づる事の樂みを想像せしめたり。ニコライ

は禮拜式後の散歩の相談などをなさん爲にや、早朝喫茶後に彼が歩行する時の例として、躍ぶが如くに疾歩して、同職者の室に走り、闔を排して入りたり。然るに訪ぬる所の友人は居らずして、其机上に一葉の大學の布告書あるを認め、何心なく其布告を讀下すれば、日本帝國の露國領事館に司祭を派遣する候補者を得るの布告なり。ニコライは日本帝國なる名を讀むや、兼て心中に期する所あるを以て、恰も何者かに驚きたるが如く感じ、彼は幾度か其布告文を讀みて、深く考へながら其室を出でたり。彼は此の時ばかりは平素の奔躍疾驅の如き歩みを爲さず、恰も牛が其歩みを移すが如く、緩行徐歩して自室に歸り、机に恁りて熟考せり。

彼思へらく、一領事館の司祭として甘んずる如き元より願ふ所に非ず、されど若し領事附司祭として、基督教の福音傳道の便を得らるべくんば、是れ逸すべからざるの好機なり。若し神は余をして日本傳道の希望を成就することを許し給はば、余は領事館附一司祭たる職に甘んじて、日本に渡航すべし。彼は斯く略々決心したるも、尙日曜禮拜の祈禱式中に神に祈りて其意を定めんと思ひ、間もなく聖堂に入りて祈禱式に與りたり。

僅か一二時間の後に祈禱式終りて聖堂を出るや、彼は日本行を決心し、若し神の旨あらば一身を日本傳道の爲に献げんとの鐵石の如き決心をなせり。然れども彼は何人にも此の決心を告げず、直に大學總理に面會し、其希望を述べ決意を告げたり。然るに大學の總理は元より日本に基督教を傳道するといふ如き事を念頭に置かざりしかば、ニコライの如き人物を領事館の一司祭に終らしむる事を欲せず、ニコライに告げて曰へり。領事附の司祭の如き職には敢て足下の如き人才を要せず、足下は此の神學大學校に必要な人なり、日本領事附司祭の職は、他の希望者に譲りて、足下は此の大學に留り、教授の講座を擔任すべしと。ニコ

ライは總理の言を聞き終り、徐に答へて曰へり、閣下の厚意と不肖の身に對せらるゝ敢て當らざる推薦とは、深く感謝する所なり。不肖若し單に領事附司祭たる希望を以て、閣下の推舉を拒まば、誠に故無き事なる可きも、不肖の希望は、決して去る單純なる職務の上に存するに非ず。未だ基督教を信せざる異邦の民に、基督の福音を傳へ、是を教化せんとするは、不肖の宿志なり。今幸ひに異教國の日本に、領事館附司祭を遣はすの擧あるは、余に取りて逸す可らざるの好機たるを信する者なり。閣下若し不肖の希望を諒とせられ、日本行を許可せられなば、神全能者の佑助を祈願依頼して、必ず宣教師たるの使命を全うして、神に對し、教會に對する、萬萬一の義務を盡す可しと、總理はニコライの意志、希望斯の如く、又勵す可らざるを認め、遂に彼が願の如く、日本行を許可し、聖務會院に報告すべしと告げたり。茲に於て、ニコライは明日を以て、某修道院に赴き、修道士たらん事を望めり。大學總理はニコライの事の餘りに急激

なるに驚きたるも、彼の性質は斯の如く、即決果斷、少しも猶豫を置かざる勇斷敢爲の氣象なるを熟知せしかば、明日を以て、修道院に赴き、修道士となる事を承認せり。

ニコライは斯く決心して、明日よりは出家得道の身となり、三條の誓約即ち第一に終生世俗の財産を有せず、第二に終生妻帯せず、第三に長者に對して無限の從順を守る事の誓ひを立て、所謂世を捨て俗を脱したる修士の生活を爲す可き身となりたり。されど彼は此の決心も、日本行の事も、何人にも告げざるなり。彼は斯く決心して後、其態度に少しも變はりし所なく、能く諧謔の言をなして、朋友を笑はしめ、何人も彼を以て、明日より出家修士の身となる可しとは、想像だもせざりき。

彼は出家修士とならんと決心するや、先づ其が兩親の承諾を得ざる可らざるを以て、急忽一書を認め、故郷スモレンスクの父に送れり。其書面の要に曰く、我が慈父慈母の恩愛と神の祐護を得て、大學を卒業し、今や

一身の方針を自決すべき時となりぬ慈愛に富み神に敬虔ある我が父  
 上と母上とは我に一身を神に献げしめんとして我を愛育せられ予幸ひ  
 に父母の御心を體して業成り今日に至りたり予は今や神の恩祐によ  
 りて一生修士たらん事を決心せり我が父上と母上とは我が此の決心  
 を聞き給はざる必ず欣び給ふ可きを信ず予は既に此の決心を校長に告  
 げ彼の承諾をも得たり又予が修士たらんとするは、大なる一の希望を  
 成就せんが爲なり予が一生の事業は神の爲に一身を献ぐるに在りて、  
 予は最も神聖なる事業を選び神の福音を異教の民に傳へんとするは、  
 予が平素の祈願なり予は此の希望を懐く久しかりしも未だ此の希望  
 を實行するを得るの機会を得ざりき然るに今回聖務會院は、日本國に  
 領事館附司祭として一人の司祭を派遣せんとして其候補者を大學に募  
 り予は平素の宿望を成就するの機失ふ可らざるを認め候補者とな  
 りて出願せり予は領事館の司祭として一生を終りて満足せんとする

者に非ず只是に便利を得て日本國の異教民に基督の福音を傳へ彼等  
 を教化せんとするに在り予が父上と母上とは必ず予が此の希望をも  
 成就するに同意せらる可きを信ず願くは我等の生命の源なる神は予  
 をして此の希願を成就せしめ我が父母にも大なる幸福を賜はん事を  
 祈ると。

彼の父母は此の書面を得て大に欣喜せり彼の敬虔篤信なる父は神に  
 感謝せり彼の母はニコライが修士たらんとする希望を聞きて喜びた  
 るも日本といふ世界の果なる萬里の異域に赴かんとするを聞きては、  
 流石に子を懐ふ親の心として是を悲みしなる可しされど彼の母とて  
 も恩愛の爲に我が子の大なる事業を妨ぐる如き婦人には非ざりき兩  
 親は喜びてニコライの希望に承諾を與へ神は彼に祐助を與へん事を  
 願へり。

然るに露國の聖務會院は、大學校長よりニコライが日本派遣の司祭候

補者に選定せられたる通知に接し、直に其資格を評議する會議を開きたり。聖務會院は即ち露國寺院總本山の寺院會議なれば、本山の宿老は皆此の會議に列して評議に與るなり。ニコライの資格に就きて宿老は種々の評議を爲せり、會議の多數は日本に派遣する司祭は、年長熟練の司祭ならざる可らず、若年の司祭を風俗の不良なる異教未開の國に派遣するは甚だ不可なりと主張せり。然るに帝都大寺院の最長座の大僧正たる府主教は、衆説に反對して曰く、ニコライは若年と雖、既に神學大學を卒へし者なり、決して一般若年の書生輩を以て目すべきに非ず。彼は既に學問を以ても、品行を以ても、我等の間に其信を得たる有爲の青年なり、彼を日本に派遣する何の憂ふる所あらんやと、宿老皆此の府主教の説に服して、ニコライの日本行に承諾を與へたり。

(五) ニコライ出家して修士となる

ニコライは神學校總理より修士たる事の承諾を得、又聖務會院よりは日本行出願の許可を得たり。彼は獨り一室に入りて、密かに輿地圖を開き、幾度か日本帝國の位置を見て、未見の日本國に既に其身を置きたる如く、種々の想像をなせり。彼が地圖を開きて、極東絶海の一孤嶋の如き日本の圖に眼を注ぎ、其山河やいかならん、其人情風俗やいかならん、我は日本に行き、先づ如何なる事を爲すべきやなど、千思萬考し、且つ未來の希望に自ら勵まされて、歡喜言ふ可らざる者ありき。さなきだに元氣活潑なる彼は、半ば其平素の宿望を成就したるが如く、感したる事として、其元氣は更に平素に幾倍し、欣喜雀躍自ら禁ずべからざる者の如くなりき。

されど彼は其決心と事業の希望とを、未だ其友にさへも告げざるなり。彼は其性質として未だ實行せざる前には、何事をも口外せざるなり。是れ自ら口外して萬一其決心を實行するを得ずんば、自らの耻辱たるの

みならず、將に斷行せんとする決心の障害は、那邊に伏在するを諷らざるを以てなり。故に彼は常に言はずして行ふの主義を持ち、突如として命じ、突如として決行し、今日一室に在りて、靜かに事務を取るも、明日は何處に赴き、何事を爲すや、彼の事務の補助者と雖知らざる事あり。ニコライが修道士たることの許可を得たる日は、彼が一親友の結婚の行はる可き當日なりき。露國正教會の風習として、結婚の式は聖堂にて行ひ、其式には花嫁花婿の男女兩人の媒妁人と外に男子未婚者二人が花嫁花婿の冠する花冕を持ち、且つ結婚式一切の世話役を爲すの風俗あり。此の日ニコライは其親友の爲に、此の世話役を爲さざる可らざりき。彼の心中は出家となりて、萬里の異域に赴かんとする希望を以て充満せられ、全心力が爲に傾せられて、他を想ふの猶豫も無き程なるに、友の爲なれば是非も無く、明日出家の儀式を受けんとするニコライは、今夜友人の結婚式場と宴會との世話役を爲さざる可らざりき。

其日午後となりて既に結婚式の時刻は來りぬ。ニコライは神學大學の一教授より、フロックートを借來りて、友人稠座の一室にて其を着し、諧謔の言口を衝いて出で、友人等を笑はしめ、既にして彼は服裝を調へ、室を出でんとする時、友人等に告げて曰く、今夜は某君の婚禮に往き、明日は寺院に入る可しと、友人等ニコライの言を聞き、其何の意なるやを解したる者無かりき。後にニコライが其翌日を以て寺院に入りて出家したるを聞き、始めて此の時の言を解し得たり。

友の結婚式は聖堂に於て嚴かに行はれ、其より式場に列したる親戚知人は、花嫁花婿の催ふしたる宴會に招待せられたり。ニコライは一二の友人と共に、宴會の幹事となりて、來賓を接待せり。宴會に次いで舞踏會は開かれ、來賓は交々舞踏し、洋々たる音楽は興を添へて、夜會を賑かからしめたり。

彼ニコライは眉目清秀の青年として、特に大學卒業の一紳士として、幾

多の令嬢等より舞踏の伴侶たらん事を其心に期せられたり。當に其心に期せられたるのみならず、四方の來賓より令嬢方の母親に促され頼まれて、ニコライは令嬢等と相携へて數番の舞踏を演じたり。彼は其顔と舉止とに自ら努めて愉快を装へり去れど其心は全く木石の如く、銀燭煌々奏樂の洋々たる此の夜會は、彼に何等の感興をも與へざりき。彼は心茲にあらすして舞踏を演せしかば、令嬢方の翩々たる長裾を踏み裂きて自ら心にも留めず、傍人をして氣の毒なる感爲さしめたり。其夜彼は酒も飲み舞踏をも演じ、宴會の萬事を幹旋して、學校に歸り、殆んど夜の明くる頃に僅に一睡せり。少時の熟睡より醒めたるニコライは、例の如く朝の祈りを終へ、一椀の茶を喫し了り始めて友人等に其心事を告げ、今日今時この學校を出で、某寺院に赴き、出家の式を受けて修士となり、一兩日を以て日本に赴く可しと告げたり。

ニコライより此の眞面目なる心事と壯圖を聞きたる友人等は、素より彼の言を疑ふ者一人も無かりしも、其意外なる事に喫驚し、一人として彼に物言ふ者なかりき。彼ニコライは更に言を改め、日本傳道は容易の事に非ず、必ず神祐と諸君の後援に據らざる可らずと告げ、友人等皆其壯圖を賛して助力を爲すべしと諾せり。將來同窓同學者にして、日本傳道に援助を與へたる友人甚だ多く、今も尙本國に在りて、ニコライの傳道を助け居る者尠からずといふ。

其より彼は直に寺院に赴きて、出家の式を受け、俗稱イアンの名を改めて、始めてニコライと呼ぶに至れり。彼は次いで司祭となる、按手禮を受け、神學士、修道司祭の聖職を帶ぶる身となりたり。彼は同時に領事附司祭となりたれば、尠からざる年俸を受くるの辭令書を受けたり。彼思へらく、斯の如き年俸を受くるも、我れ之を用ふるの道なし。此の中より僅々の金額あれば、雲水孤獨の此の一身を衣食するに足れり。されば年々何十圓は育兒院に寄附し、何十圓は孤兒院に寄附し、殘る何十圓は知己

の貧者に分ち、尙多少の殘額あり斯の如くに此の金を用ひなば甚だ樂しと自ら欣び樂みて、一老僧に此の事を告げたり。老僧某の曰く、足下の希望甚だ善し、されど日本に赴き傳道を開始せば、意外の用途多かる可し。年俸寄附金の事は、日本に渡航して然る後にすべしと。ニコライが日本に渡來して傳道を開始するや、此の老人の言の如く、年俸の全額を日本傳道の爲に消費して、尙ほ足らざる者ありしかば、ニコライ自らも世に經驗無き若き者の計劃は皆斯の如しと談れり。

（六）四十餘年前ニコライの西比利

亞橫斷旅行

ニコライが日本行の決定せらるゝや、輿地圖を開きて海陸何れの途に由りて日本に赴くの便利なるやを考へ、彼は海路船中に坐臥して、無聊の旅行を爲さんよりも、西比利亞を橫斷し、陸路日本に赴く可しとの決

心をなせり。

西比利亞鐵道の開通したる今日を以てすれば、西比利亞の旅行素より難きに非ず。今より四十四年前と云へば、日本の如きは函嶺八里を駕にて越え、大井川を渡るに輿に乗りて昇がるゝ時代なりき。當時の西比利亞は素より汽車の便あるに非ず、其道路と雖も、延々たる千百里の山道野徑僅に土人の交通に便せる小徑たるに過ぎず。又驛路に旅客に便を與ふるに足る客舎の設あるに非ず、敢て山に臥し野に寝ぬるの艱苦なしとするも、旅途の疲勞を息むるに足る旅店に休泊する如きは、得て望む可らざりき。

斯の如き不便を物ともせず、ニコライは愈々西比利亞を経て陸路日本に赴く事となり、行李を整へ、途中故郷スモレンスクに立寄り、兩親に告別せんとて、聖彼得堡を出發せり。時に一千八百六十年即ち我が萬延元年の七月なりき。



彼はスモレンスク縣なるペリョーザ村に立寄り、兩親に見え、親戚を問ひ、再會殆んど期すべからざるの告別を爲せり。彼の性質として、故郷父母の家なりとも、用無きに安閑として遊び居らる可きに非ず。彼は故郷に留まる僅に二日にして、西比利亞を指して出發せり。其よりして具に櫛風沐雨の辛酸を嘗め、深く西比利亞の地に入り、山河を跋涉し、或時は一農家に頼みて一宿を請ひ、或時は寺院教會堂の一隅に夜を明かして、八月下旬にイルクートスク驛に到着せり。イルクートスクといへば、今こそ西比利亞に多少其名を知られし都市なるも、其當時のイルクートスクは人煙稀なる曠原の中に在る一小村落たるに過ぎざりき。是よりは黒龍江の河流延々として長蛇の如く野を通じ山を廻りて東流するを以て、小舟に竿さして流れを下るを得べし。

ニコライはイルクートスク驛より便船を求めて黒龍江を下りしが、黒龍江は一江流と雖、處としては河幅廣く、碧流長堤を瀧ひ、漂蕩河泊決し

て、風流雅遊の舟行に非ず、且つそれ江流に竿さして下る間にも、風波の危険なきに非ず。舟行數日の後の事なりしが、風大に起り、江流激浪を揚げ、船將に覆没せんとするが如き事に遭遇せしも、幸ひに事無きを得たり。斯る危険困難の際の彼の態度は、地中海の逆風に破船せんとしたる聖使保羅の如く、安然として同船者を慰め、更に驚怖の念を起さざりき。長堤曲浦の河泊殆んど三十餘日にして、舟行無事に九月下旬にニコライフスク市に到着せり。西比利亞の氣候にて九月下旬といへば、胡馬朔風に嘶き、山野霜白く、草木凋落して、滿目の秋景蕭々たる時候にて、日本へ渡る可き航期の既に終りし時なり。彼は止む無く此の地に越年し、來春を期して日本に出發せざる可らざる事となれり。此地に冬を送り、無聊の越年を爲すは、彼に堪ふ可らざる苦痛なりしも、彼は能く時を利用し、携ふる所の數卷の書を友となし、日夜研學倦む無く、又此地に一人の老宣教師インノケンテイなる人ありて、人民の尊崇を得居りしかば、ニ

コライも亦屢々此人を訪問して其教訓を受けたり斯くて其歳も暮れ、翌年の春も過ぎて四月に至り日本への航路開通して便船ありしかば、彼はニコライフスクを出發して日本に向ひ海上無事に我日本帝國の函館港に到着せり時に我文久元年の六月二日なりき彼が其胸裡に描きし理想の天地たる日本の山川を始めて觀し時の彼の感慨や果して如何なりけん彼は海上遙に我北海の翠嶺を眺望したる時は自ら生れし未知の故郷に始めて歸來せるが如く感じ心中に言ふ可らざる安慰と希望を感じたりといふ彼が日本帝國の風土を愛するの端は既に此時に發し彼が希望と聖愛とを献げて來着したる日本の山河は彼を歓迎し彼をして終生此の樂土を去らずとの決意を爲さしむるまで彼を樂ましめたり。

(七) ニコライ日本の函館に來着す

日本の人民を教化せんとする雄大の希望を有する青年宣教師は西比利亞を横斷し北海を航して日本の互市場たる函館港に來着せり當年彼の年齢は二十四歳豪邁の資勇健の質萬難と戦ふ不撓不屈の氣慨ありて薄志弱行の徒輩の得て學ぶ可らざるものありき彼が函館に着して基督教を宣傳せんとしたるも切支丹禁制の法度甚だ嚴重なりしかば彼は其翼を戢め時期の到るを待てり此間實に八年間なりき彼が意志の強きと忍耐の精神に富める事は此の一事を以ても知るを得べしニコライが文久元年後維新時代に至るまで如何なる事をなし又如何なる人物と交はり日本帝國に對して如何なる見解を有するに至りたるやを識らんと欲せば先づ維新前の函館港の狀勢を明かにせざる可らず此の函館港は其地勢より考ふるも我が北門の鎖鑰たる要害の地なり幕府茲に見る所ありて寛政十年の交に津輕南部の兩藩に命を下し兵を發して之れに據らしめ蝦夷地の警備をなせり幕府が歐米諸國

と互市貿易の條約を結びて後は、函館も亦互市場となりしかば、攘夷開國の紛々擾々たる論議の盛んなる當時の事として、全國志士の視線も自ら函館に集まり、諸國の浪士の函館に遊び、世の形勢を窺ふ者抄からざりき。

函館港の奥州北陸地方に於ける關係は、恰も長崎の中國九州等に於けるが如き關係ありき。故に時事に慨する天下の志士は、九州中國等にありては長崎に注目し、北陸東奥にありては函館に注目し、凡そ志を天下に爲さんとする者多く此地に遊べり。函館は新開港の地として、東北地方より此地に移住する者甚だ多く、内外の商業を營みて巨利を博せんとする商賈は、勿論醫師、神官僧侶の輩に至るまで、此地に移住し、函館は浪士と新移住民とを以て成る新開の互市場なりき。宣教師ニコライは日本に渡來し、熟々世の形勢を觀察し、日本に一大革命の來る決して遠きに非ざるを看破せり。彼は多くの日本人特に當時

函館に流れ來る浪人輩や、移住し來る者と交際し、日本人の氣質氣風を察するに、日本人は決して鎖國的の人民に非ず、又保守的の人民にも非ざることを認めたり。彼思へらく、徳川幕府の政治は純然たる守舊主義の上に樹ちたる政治なり。封建の制度排外的の精神、皆これ日本人の根本的精神を表顯せるものに非ず。日本人は進取敢爲の氣風に富みたる人民なるに相違無きに、封建守舊の制度を以て此の人民を治めんとするも、得て望む可らず。日本は早晚必ず一の革命を経て、鎖國排外の風を一新して、世界的とならざる可らず。是れニコライが文久二三年頃より慶應の初年に至る間に、日本帝國の民情を觀察して、預期したる見解なりき。

彼は日本の前途に對して斯の如き希望を屬せり。彼が日本帝國の運命と自己の將來の事業に對する見解は、前途に希望の光明を觀るのみにて、何等悲觀的の現象をも見ざりき。彼は日本が世界的となる事を豫期

せり彼は世界的と爲る可き日本は必ず基督教を歓迎すべきを豫期せり。滿腔只この豫期と希望とあり彼が鎖國攘夷黨の朱鞘の浪人に附け狙はるゝ如き更に意にも介せざりしは素より其所なりき。

ニコライは日本の前途に對して斯の如き希望を懐き居りしかば彼は文久元年より明治の初年に至るまで凡そ八年間専ら傳道の準備をなせり。彼は其準備として此間に日本語を修めたり彼が日本語を學びし方法は決して尋常の研究法に非ざりき。彼は日々教師に就きて會話を學ぶの外に、日々何百といふ單語を諳記し、雅語俗言凡そ日本語と名附けらるゝ言語は、新古を選ばず悉く之を學習せり。ニコライは此の八年間に唯り日本語の稽古をあすのみを以て満足せず、又日本の書籍をも研究せり。當時函館には前にも述べし如く諸國より入來れる浪人の間に儒者あり、神官あり、僧侶ありて、一風變りし者のみ多かりしかば、ニコライは日本語の研究その他の事に彼等より幾多の便利を得たり。漢學

者は彼の唯一の教師にして、彼等漢學者はニコライに漢學を修めしむるに、寺子屋一流の教授法を其まゝ應用して、彼にいろはの習學を教へ、讀書は四書大學より始めしめ、論語孟子中庸等順次素讀を與へたり。勤勉不撓なるニコライは、七八歳の兒童が大學を讀み習ふ如く、大學朱熹章句を聲高かに復習して漢字の音訓を學びたり。

ニコライは本國の大學に於て神學哲學の諸科を修めたる學者にして、素より章句の人に非ざるを以て、彼が論語孟子の講義に耳を傾くるは、敢て漢字の音訓を學ばんとすの意に非ず。彼は儒教の經書支那の歴史等、其他諸子の書を研究して、支那哲學の何ものたるやを究めたり。彼が漢學に通ずるの一事を知らんと欲せば、教會祭日の夜に駿河臺の聖堂に至り、彼が祈禱の儀式を行ふ時、堂の中央に出で、新約を讀むを聞く可し。又彼が一人の漢學者を相手に譯せる所の多くの書を一讀せば、彼は確かに漢學者なる事を認むべし。彼は當時函館に於て儒教を研究した

るのみならず、神道佛敎等をも究めたり。彼が佛敎研究の事は後章に詳述すべきも、彼が日本文學を研究したるの一事は、序に茲に略述すべし。ニコライは當時便船に托して、故郷の一友に與へたる書信に左の事を記せり、「予は最初いかなる程度に於て福音の傳道を以て、此の國を教化せんとする希望を實行し得らる可きかを識らんとため、日本の歴史、宗敎、文學及び日本國民の人情風俗を詳密に研究せり（正教傳道誌 第一卷三章）彼は勤勉不撓の精力を以て、數年にして日本語を修め、讀書力を養ひ、和漢文を自由自在に讀み得るに至れり。茲に於て彼は漢學者神官等を先生となして古事記、日本記、大日本史の類は勿論、小説、物譚の類に至るまで、手に觸るゝに従つて之を讀み、其の意を尋ね、能く群書を涉漁せり。函館港の一書肆、其店を賣物に出せしを、ニコライは店頭の圖書一冊も遺さず、皆買ひ占めて、己の文庫となし、今尙駿河臺神學校の文庫の一部を成せり。此の一事を以て察するも、彼が日本の書物を愛讀し、日本の人情風俗を究

めたるの注意を知る可し。彼は斯く日本の歴史文物を研究したるの結果、東洋には東洋獨特の文明ありて、日本の文明は世界各國に於て比類を觀る可らざる特殊の文明なる事を識認したり。故に彼は日本の文物研究に熱心し、若し終生日本文物の研究者を以て任じ、之を歐洲諸國に紹介せば、其愉快、その利益、決して少々に非ざる可きを感じたり。されど彼尙思へらく、斯の如き事の研究は、又其人無きに非ず、予は日本文物の美觀に心を奪はるゝ無く、寧ろ當初の目的の如く、日本國民の心田を以て我耕す可き美田と爲すに若かずと、彼が日本文物の崇拜者となり、日本の青山を埋骨の地と爲さんと決心したるは、決して偶然の事に非ざるなり。彼は斯の如くして、八年の長年月を『日本研究』に送りて時機の到るを俟てり。而して日本帝國の國情は、彼が六七年前に預期したるが如く、次第に革命の歩を進め、今は確に一道の曙光を認むるに至れり。彼は深く信

ぜり、今こそ切支丹宗門の禁斯の如く嚴重なるも、時到らば日本全國に自由自在に基督教を傳道するの時代を來すべしと、彼が日本傳道の前途に希望を屬して、當時故郷の一友に送りたる書に「此國の事情を益々深く研究するに従つて、今や將に福音の言を侃々として宣へ傳へ、日本帝國の隅より隅に至るまで、迅速に傳へらるゝの時期敢て遠きに非ずとの信念を深からしめたり」と、彼は此の信念に基きて、日本傳道の準備の爲に、將來教會に於て用ふ可き教義儀式、祈禱等に關する書類を、日本語の教師と共に翻譯せり。又彼は未だ日本に一人の信徒をも得ざる先に、日本傳教の方針を一定し、十四ヶ條の宣教規則なるものを作りたり。其規則には宗教教育の學校設立の事、信徒五百人を得ば一名の日本人の牧師を選立すべき事、五百人毎に牧師一名を増加すべき事、信徒五千人に満たば一人の主教を露國より招致すべき事、宣教の事を評議する會議を開く可き事等を定めたり。彼は將來傳道に着手して、日本人の信

徒を得るや、此の方針に基きて宗教の學校を設立し、又牧師をも立て、自ら其選に當りて主教をも立て、日本の布教を評議する爲に、年々牧師傳道師の會議をも開き、當初一定したる布教の方針を持して、今日に至れり。彼が其自信の深き、又時勢を達觀するの明ある、此の一事を以ても察すべし。

ニコライ主教が純然たる宗教家たるの事實的の證明は、彼が自ら計劃し、自ら實行し來りたる傳道事業之を證して餘りあり。彼が日本に渡來して八年間、日本語を研究し、明治初年に至りて、將來の事業の方針として定めたるものは、實に是れ上述宗教宣傳の規則にして、此の規則の主義方針と精神とが、今日の正教會にも實施せられ居るを觀ば、ニコライの主義精神が那邊に存し、彼が希望の如何に高尚なるかを識知すべし。

(八) ニコライと維新の革命

宣教師ニコライが北海の一隅に蟄居して、日本語、日本の文物を研究して餘念をかりし時、日本内地の形勢は、風雲甚だ急にして人心穩かならざる事のみ多かりき。徳川の政治も二百餘年の威勢將に地に落んとして、僅に其情力にて公儀の威を保ち、千代田城の鼎の輕重は、薩長書生の言論に左右せらるゝ秋とはなりぬ。將軍の御上洛、伏見の事端、愈々御國の大事となりて、三百年の泰平の夢初めて覺め、全國六十餘州の大名、小名、其に従ふ幾萬の武士は、勤王佐幕の二大旗幟の下に別れて、天下を争ふの時代とはなれり。

今や日本全國は鼎の沸くが如くなりて、戰雲全土を覆ひ、凄風慘雨、御國の前途殆んど料り識る可らざるものあるに至れり。東北の勇藩、仙臺の城主は、藩祖正宗公以來の恩顧の武士を糾合し、東奥諸藩の盟主となり、

開國佐幕を國是となして、旗を揚げたり。薩長の諸藩は、尊王攘夷を名として、西南に起り、奥州征討の救命を奉じ、全國勤王の諸藩の兵を合し、東北陸の兩道より軍を進め、奥州の國境に攻寄せたり。奥州の諸藩は、兵を別ち、敵を國境に迎撃せんとの戰略を定め、仙臺藩は、東山道白河口の中堅を守備せり。然るに秋田藩先づ同盟を脱し、次で相馬も叛き、仙臺藩の左右兩翼は、皆敵となり、背後に南部津輕の二藩あるも、到底日本全國の兵を相手に戦ふを得べきに非ず。遂に仙臺は敵に降りて、城下の盟を爲し、志士皆或は自及し、或は斬せられ、又後圖を期して出奔せる者も多かりき。

上野、東叡山の役に破れたる徳川の浪士、東北の戦争に破れて、郷國を脱したる浪人等、何れも上方地方に身を容るゝ地無きより、函館を指して落ち来る者甚だ多かりき。當時函館に落来る者の中には、或は深く北海道の内地に赴かんとする者もあれば、便船を求めて外國に航せんとす

る者も尠なからざりき。是等の浪士は函館に至りて、ニコライの名を聞  
傳へ彼を訪ひて世界の形勢を識り、維新後社會に其名を爲すの機会を  
得たる者も多かりき。

當時函館港に澤邊琢磨といふ一浪士あり。此人は土佐の藩士にして江  
戸に出で文武の修業をなし居りし際、尊攘主義の浪士と交はり、國家の  
ために爲すあらんと期したるに、不慮の事より幕府の嫌疑を受け、函館  
に脱走し來れる人なり。彼は當地に來りて身を神明社の宮司に寄せた  
るも、素より一神官の職に甘ずる志士に非ざりしかば、野心勃勃として  
自ら禁ずるを得ず、機會の乘ずべきものあらば、其志を成さんと期せり。  
されば函館に來る浪士の輩を招きて之を結び、又内地の形勢を探れり。  
澤邊琢磨等尊攘主義の浪士輩は、宣教師ニコライの名を聞傳へ、我日本  
に古來禁制の切支丹宗門を傳へんとするは、是れ唯り國憲を犯すの大  
罪人たるのみならず、又日本帝國を危うせんとする者ならざるを得ず。

斯の如き奴輩は宜しく天誅を加ふ可き者なり。されど事の理非を辨せ  
ず、に誅戮を加ふるは、武士の好まざる所なれば、一度彼の外奴に面して、  
其心中を訊問し、其答辯の不敬不法なるものあらば、立所に一刀の下に  
斬殺すべし。澤邊琢磨は血氣の壯士なり、斯く自ら決心せしかば、突然ニ  
コライの居館に至りて彼に面會せり。澤邊はニコライを罵りて、爾は我  
國を覬覦する間者なり、爾の信ずる外教は邪教なりと曰へり。然るに宣  
教師ニコライは少しも激せる様子なく、之に答へ「貴下は耶穌教の何た  
るを識りて此言をなさるか」と反問し、更に澤邊に向つて耶穌教の講  
義をなせり。澤邊は始めて彼の説を聞き、耶穌教は豫て想像する所と大  
に異なるものあるを認め、其後屢々ニコライを訪ひて教義の質問をなし、  
深く耶穌教を究め、明治元年に洗禮を受けて信徒となれり。  
明治元年は王政復古の一大變革のありし歳なるも、ニコライは世の變  
遷に關はらず、密に基督教を傳へ、二三人の信徒を得たり。然るに當時函



館に脱走し來れる徳川の兵と官軍と函館に於て戦争ある可しとの事にて人心恟々として又宗教宣傳の機にあらざりき。されどニコライは此の混沌たる社會に在りながら、基督教宣傳の時機目前に迫り居るを認めしかば、幸ひに函館戦争を本國露西亞に避け、將來の傳道に大に備ふる所あらんと欲して、便船に搭乗して歸國せり。

宣教師ニコライ本國に歸り、七八年間日本に在任して自ら研究したる結果を露國の宗教社會に發表し、日本傳道の必要を述べたり。聖彼得堡、莫斯科、希府等の上席高僧等續々ニコライの意見に賛同し、始て露國に傳道會社を組織し、ニコライを以て日本傳道會社々長となし、大に傳道費を募集せり。明治二年にニコライは僧位一階を進められ、掌院となりて再び日本に來航せり。函館來着後ニコライは仙臺藩の士族より多數の信徒を得たり。此の仙臺の士族は何れも薩長の諸藩と戦ひて敗北し、遂に逆境に立ちて志を成すの道を得ざりし人士なり。特に官軍に

敵したる有力の人物は、檢擧甚だ嚴にして、郷國に居る能はざりしかば、皆諸國に遁逃せり。當時東北の諸藩を糾合して、官軍に抗敵したる如き人物なれば、何れも位置あり名望ある人々なるも、維新後は薩長士の天下になりて、彼等仙臺藩士の如きは、其學識智謀薩長の人士に譲らざる者あるも、其志を成すを得ざりしなり。日本國內に於て志を遂ぐる能はざる仙臺の志士は、函館に露人ニコライなる偉人あるを傳聞し、彼に交を結びて志を外國に成さんと謀りたる者多かりき。小野庄五郎、影田孫一郎、高屋仲等十數名の者は、或は外國漫遊を目的に、或は露國に儒教を傳ふる目的に、何れも函館に赴きてニコライに交り、其教育を受け、遂に基督教を信じて傳道を任ずるに至れり。當時ニコライに交りたる人々にて、米國に赴きたる者數名あり、新井常之進、新島襄、何れも函館に集まりたる浪士なりき。

斯の如くにしてニコライは着々傳道事業を擧げ、日本人にして傳教師

になりたる者を東北地方を始め、東海道より九州地方にも派遣せしかば、傳道の本部を東京に移すの必要を認め、明治五年に東京に移住し、現今の駿河臺に居を卜し、學校を起し、盛に布教を擴張し、今日の大教會を成立せり。

(九)

主教ニコライの事業

主教ニコライが日本に傳道開始以來、銳意盡力する所の宗教事業は、是を三方面より觀察するを得べし。

第一は宣教師たり傳道者たるのニコライの事業なり。彼は最初の間は、日夜自ら市中に出で、傳道に従事し、希望者あれば戸毎に出席して教義の談話をなせり。又機會あれば公開演説にも出席して講義をなしたる事屢々あり。されど彼は如何に銳意傳道するも、彼一人にて奔走するのみなれば、其範圍狭く其結果も亦大なるを期すべからず。故に彼は自

ら傳道の局に當るの得策ならざるを認め、多くの日本人に宗教教育を授け、彼等をして傳道に當らしむる方針を取れり。彼が斯の如き方法にて傳道するが爲に、養成未たる人士は、殆んど千を以て數ふるを得べし。されど傳道の職は自ら貧究に甘んじ、困難と戦つて努力せざる可らざる事業なるを以て、永く傳道事業に従事する者無く、現今二百人前後の傳教者あるに過ぎず。

ニコライは傳道上の一切の事業は、決して獨斷を以て行はず。年々七月を以て東京に全國傳教者牧師の會議を開き、是を公會と稱して萬事此の公開の決議に基きて實行せり。此の公會にはニコライ自ら議長となりて議事を司り、請願建議等の議案を討議せり。彼は此の會議の時に議長の職を行ふのみならず、自ら議員の言論を露西亞語にて筆記し、是を露國の傳道會社に報告せり。無論日本語筆記の爲には、別に書記を設けて之を筆記編纂せしむるなり。傳教の方針計劃等一切の事、此の公會に

て決議し、各地方の臨時の事務は、皆地方の牧師と傳教者にて施行せり。

第二は教育家としてのニコライの事業なり。ニコライは神學校、傳教學校、女學校等を設立し、大に教育を奨励し居るは、其目的全く基督教弘布の一事に在るを以て、彼の學校は他派宣教師の設立せる學校の如く盛ならず、されど其目的確定して、範圍の狭きだけ學校の組織も秩序も完備せり。彼の主義として日本人を教育するには、日本人を以てせざる可らざるの主義を取りて、學校教師には一人も外國人を依頼せず、彼が自ら教育し、若くは露國大學に留學せしめたる、日本人の教師をして、一切の教育を擔任せしめ、今日となりては、ニコライ自らも教育の衝に當り居らず、悉く日本人を以て教育を擔當せしむ、是れ彼が自ら持する所の日本主義に基くものなり。

第三には彼が傳道の一方法として、及び信徒を教育する必要條件とし

て盡力する所の事業は、教義書の著作翻譯の出版事業なり。彼が自ら監督して著作翻譯の業に當らしめ居る者二十名前後の人々ありて、年々抄からざる書籍を出版せり。其の著作翻譯書類は、大部分は信徒の信仰を養ふ讀物類なるも、年々數千部の小冊子類を出版して、無代價にて各地方の傳道地に配布せり。

ニコライの教會にては三種の雜誌を發行せり。一は『正教新報』にて毎月二回刊行の雜誌なり。此の雜誌は神學哲學上の論文及び時事問題に關する論文を掲ぐる正教會の機關雜誌なり。『正教要話』は毎月一回發行にて、重に基督教の説教を掲ぐる雜誌なり。『女子神學校より』『うらにしき』と題する雜誌、毎月一回發行す。この雜誌は女子教育に關する文章と露國文學を社會に紹介する目的の雜誌なり。

ニコライは日本に基督教を傳教する爲に以上の如き機關を備へ、着々其事業を進歩せしめ、敢て誇大なる廣告的の事業を爲さず、萬事實際の

結果を擧ぐるを以て目的とせり。

## (一〇) ニコライの日本化

露國宣教師なるニコライは其國籍こそ露國なれ彼の思想感情等は全然日本化して彼は萬事を觀察するに皆日本的の見解を以てせり彼は日本の風俗習慣等に對しては殆んど極端なる保守主義を以てして日本の風俗を重んずる事日本人よりも甚だしきことあり。彼が駿河臺の神學校に於て生徒を養成するに此の主義を以てするより學生は彼の監督の下に在りて行儀作法までも教へられ坐作食事の些事に至るまで悉く日本風に養はるゝなり神學校の寄宿者は何れの室も御殿風の構造にて立派なる床の間あり疊は縁附の備後表に襖は芭蕉布の白地なり自修勉強用の机は一脚四人ツの坐り机にて若し學生が讀書の時に胡坐をかき足を投出すの無作法を爲さばニコライ

は彼等を以て無作法者となし禮義を知らざる者として叱責するなり。彼は日本の風俗に對して斯の如く嚴重なる保守家なれば徳義上の事も良善なる徳風に對しては大なる保守主義を持せり彼は維新前より四十餘年間日本に在りて維新前後の日本の變遷を觀今日の人情風俗を察し善良なる風習の破壊せられたるを大に遺憾とするもの尠からず彼が日本特長の美風として賞讃する所のものは長幼の別君臣の禮士人の氣風等是なり彼は其部下二百有餘名の牧師傳道師に遵奉せしむる唯一の規定は老者は父の如く幼者は子の如くせよとの教訓是なり。

ニコライの創設したる正教會にも多く露國に遊學して歸國したる人々や神學校に於て西洋思想の感化を受けたるハイカラ人物尠からず斯の如き才子が時々西洋主義の進歩改良をニコライに獻策する事もあるも若し其計劃が日本の風俗習慣に反する事ならんにはニコライは

天保時代の老人の資格を以て、一言の下に之を排斥するを例とす。彼は國民の特殊の風俗を重んずる斯の如くなるも、教會の世界的風習と國民的風習とを區別し、教會の世界的風習を國民的風習を以て變改する事を好まず。此點に於ては、彼が國民的風習の混合を厭ふは、敢て唯り日本の國民的風習のみならず、露國の國民的風習に對しても、同様なり。

彼は常に部下の牧師傳教師に訓戒して曰へり、基督教會は萬世に亘り、萬邦に通じて不變不易なる宗教なり。然るに基督教的の諸國に傳はるや、其地方の人情風俗に應じて、多少外觀の風習に地方的の性質を帶ぶるを免れず。グレーキの教會にはグレーキ特有の風習ある可く、英國の教會には英國の風習あり、ロシアの教會にはロシア特有の風習ある可し。此の地方的の風習は是れ決して基督教會そのものゝ風習に非ざるを以て、日本の教會にロシアの風習を傳ふ可らず、グレーキの風習も傳ふ

可らず、日本は日本にて萬世不變の基督教會に、日本國特有の風習を合して日本基督正教會なるものを組織すべし。日本に基督教を傳ふるも、ロシアの基督教を傳ふるに非ず、些少にてもロシアの風習を混入して傳へんか、是れ宣教師たるものゝ大罪なり。宣教師は只純然たる不變不易の基督の福音を傳へなばそれにて足れりと。是れニコライが基督傳道の方針にして、其生國たる露國の人情風俗外に卓立して、自ら世界の使徒を以て任ずる所以、實に此に存するなり。

ニコライ主教の日本の國體に

對する見解

ニコライは國家神立主義を信ずる人なり。國家神立主義とは世界に存する各國は何れも是れ神の意志に因り、造物主天帝の攝理に依りて存立するものなりとの主義を言ふなり。故に彼の見解によれば、露國が天

帝の意志によりて存立すると同様に、日本帝國も亦天帝の意志に因りて存立するものなり。

又彼の見解によれば、各國が其國體を異にするは、是れ亦其國々の國家の事情に應じ、必然の要求に應じて然るものなり。故に彼は日本帝國の立憲政體を美とすると同時に、露國の君主獨裁政治をも美とせり。

ニコライは日本帝國と日本の國體に對しては、特別の見解と尊敬の意とを有せり。彼嘗て言ふて曰く、日本帝國が建國以來二千有餘年間、萬世一系の皇統を有する帝王を戴き、一度も外國の侵略を受けし事無く、今日に至れる所以のもの、決して偶然に非ず。造物主神は惡を罰し善に幸する公平無私の神なり。日本帝國が二千有餘年間、斯の如く造物主の寵佑を得て、益々國家の盛運を致せる所以のものは、是れ一に日本の皇室の至徳と、人民の忠良なる徳風に原因するものならざるを得ず。皇帝が國の父として國家に君臨し、國民を見る子の如く、國民も亦皇帝を父の

如くに尊び、是を神聖視する事、日本國民の如きもの世界中何れの邦國にか其比類を見んや。上に君臨する帝室に此の至徳あり、下に悦服する民に此の良風あり、神が日本帝國に特に神恩を垂るゝ決して偶然に非ざるなりと。是れニコライが日本國に關する獨特の見解なり。彼は此精神よりして、日本帝國に對し、特別の尊敬と特別の希望とを屬し居る者なり。

先年我國に於て憲法發布の大祝典の舉行ありし際、駿河臺の神學校に於て大祝賀會を催せし事あり。ニコライ其祝場に臨み、日本帝國の憲法發布を祝して、大要左の如き意味の演説をなせり。

古今西洋各國の憲法史を案するに、此の日本帝國の如くに、平和的に憲法の發布を見たるは殆んど類例無き現象なり。歐洲に於て憲法を發布したる國々、尠からざるが、多くは國民が政府に迫り、君主を強迫して君主をして憲法を發布せしめたるものなり。故に君主は憲法を發布した

りて雖其實は人民より強迫せられて憲法を發布せしめられたるに過ぎず。故に君子は人民を愛し、人民の權利を重んじて憲法を興へたるに非ずして止む無く君主の權を割きて人民の權利を認めたるに過ぎず。されば憲法の發布前には必ず戦争あり、君主人民の衝突ありて後に始めて憲法の發布を見たり。

然るに日本帝國の憲法の發布は事實全く異なれり。皇帝陛下の至仁なる人民の權利を重んぜられ、人民が大政に參與するの進運に向へるを明察あらせられ、皇室と人民との間に何等の衝突もなく、全く平和の間に憲法發布の此の祝典を見るを得たり。内外の臣民皇土に在りて陛下仁政の天恩を被ふる者、誰が此の大祝典を慶賀せざらんや。

此の平和的憲法の發布は、惟ふに是れ決して偶然の現象に非ず。是れ開國以來日本帝國の皇室と臣民との間に存したる仁愛忠義の良風に基くものならざるを得ず。

徳川の幕府を開くや、天皇陛下は一切の政權を徳川氏に托せられ、徳川氏代々能く大將軍の任を全うせり。時節來りて天皇陛下御親政の機運を來すや、徳川慶喜公は恭順を表し、何等の争ふ所無くして、大政を皇室に奉還し、王政復古の慶賀すべき世を來せり。是れ余が久しく日本に在りて親しく見聞したる事實なり。然るに日本人民の智識進歩して大政を翼賛し奉るを得るの時勢となるや、天皇陛下は欽定憲法を人民に賜り、人民をして國政に與るの權を得せしめられたり。如此く日本の歴史は何時も平和的に政權の授受を行ひ、皇室は未だ嘗て人民の怨恨を被ぶりし事無く、天皇陛下の下民に對する大政は何時も平和的なり。願くは卿等日本帝國の臣民は、此の平和的至仁なる大御心を體し、陛下の爲に盡されん事を。

以上は主教ニコライが日本の國體と歴史に對する見解の一斑を窺ふに足る可き言にして、彼は如何に日本の皇室を尊敬し居るかを視るに

足らん。

(一一一) 日露戦争とニコライ主教

二十四歳にして生國を去り、我日本帝國に在る實に四十四年露國は生國にして日本は客寓の他郷なりとはいへ、ニコライ主教の日本帝國に對する感想は寧ろ生國露西亞に對するよりも切實なるものあり。彼は露國に生れたりと雖、宗教家としての一身は是を露國の爲に献げずして日本帝國の爲に献げ、自ら日本の土に成り了るの大決心を爲せる人なり。されどニコライ主教は露國の一人民としては、又深く生國を愛し生國の皇室をも尊敬せり。半ば露人にして半ば日本人たる主教ニコライは、最も熱心なる日露同盟の希望者にして、彼は東洋の平和の爲に、日露兩國が最も強固なる精神的同盟を成立せん事を願へる人なり。然るに露國政治家の暗愚狡

獪なるや、世界の平和を無視し、日本の親善を無にし、滿洲を占領して日露間の葛藤を惹起せり。未だ開戦に至らざる間、彼は切に時局の平和的に解決せられん事を希望し、彼が宗教家として爲し得らるゝ限りの事を爲せり。然れども露國の政治家より視る時は、ニコライ主教も亦眇たる一介の僧侶に過ぎず。露國の決心素よりニコライの得て左右し得べき所に非ず。

日露の葛藤は不幸にしてニコライ主教の希望に反して開戦の事局を來せり。彼が心中の苦悶亦察するに餘りあり。彼は言へり、余は福音の宣教師として、日露兩國の人民を視る事恰も我が生みたる二人の兄弟の如し。今この二人の兄弟が家事の爲に争ふを視て、父たる余は兄の勝利を願ふ可きか、抑も亦弟の勝利を願ふ可きか。是れ二つながら父たる余の心に非ず、兄弟相争ふを視て、其和解親睦を願ふは、父の心たるが如く、余は日露兩國が一日も速に和睦するに至らん事を望み、日夜此事の



みを神に祈りて止まずと。

日露開戦となるや、彼の日本に於ける進退は、内外人の深く注意する所なりき。二月六日露國公使ローゼン男は人を使はして公使館撤退に附き、主教ニコライにも其進退を決す可く、若し露國に歸還せんと欲せば、來る金曜日公使と共に同船すべき事を以てせり。

露國公使より此通知に接したるニコライは直に決心せり、自己の一身は既に日本の正教會の爲に献げたる身なれば、我一存を以て進退を決するは甚だ不可なり、一に日本正教會の信徒の意見に従つて去否を決すべし。若し我が一身が日露開戦となりて日本に止るの必要無しと言はば、暫時日本を去る可し、去れど露國には如何なる場合にも斷じて歸らず、止む無くんば上海に退去すべし、若し日本の正教會の爲に我日本に在留するは必要なりと言はば、余は萬難を排しても日本に留まる可しと。

彼は斯く決心せしかば、露國公使の使者の歸り去るや、直に在東京正教會の牧師、傳道師、其他の者を集めて、其進退を彼等に謀りたり。彼等教役者は更に其翌日を以て會議を開き、主教ニコライの日本に留らん事を決議せり。是より先きニコライも亦獨り祈りを献げて、自己の進退を自ら決する所ありて、彼は日本正教會の傳道の爲に萬難を排して留らんと決心をなせり。

斯の如く彼が決心と衆信徒の希望と自ら一致せしかば、彼は日本に留るの決心を公使に通知し、一身の運命を神慮に托し、日本政府の厚き保護に信頼して、日本に止まる事となりぬ。彼が其教會に屬する信徒をして、此の時局に對し、日本國民としての本分を全うせしめん事を切望して、全國信徒に左の如き公開狀を與へたり。

大日本國ノ神聖ナルハリストス正教會ノ信徒ニ告グ。  
至愛ナル兄弟姉妹ヨ、主神ハ日本ト露西亞トノ間ニ平和ノ斷絶スル

ヲ許シ給ヘリ。願ハクハ主神ノ聖ナル旨ハ成ラン。信ズベシ。是レ必善ナル目的ノ爲ニ許サレテ善ナル效果ヲ見ルニ至ラン。蓋主ノ旨ハ常ニ善ニシテ睿智ナリ。

是ヲ以テ兄弟姉妹ヨ、此ノ時態ニ當リテ忠義ノ本分ガ爾等ニ要求スル一切ノ事ヲ行フベシ。神ニ禱リテ爾等ノ皇軍ニ勝利ヲ賜ハンコトヲ求メヨ。已ニ賜ハリタル戦捷ノ爲ニ感謝セヨ。軍資ノ爲ニハ心ヲ竭シテ奉獻セヨ。戦陣ニ臨ム者ハ死ヲ決シテ戦ヘ。此レ敵ヲ悪ムニ由ルニアラズ。乃同胞ノ者ヲ愛スルニ由リテナリ。救世主ノ言フ所ノ如シ。曰ク、人其友ノ爲ニ生命ヲ捐ツルハ、愛此ヨリ大ナルハナシ。(イオアン十五ノ要スルニ、凡ソ愛國心ノ促ス所ハ一切之ヲ盡セ、蓋愛國心ハ心情ノ聖ナル者ナリ。救世主ハ己ノ身ニ於テ郷國ヲ愛スル規範ヲ示シ給ヘリ。ルカ十九ノ四十一)  
然レドモ地上ノ郷國ノ外我等ニハ亦天ノ郷國アリ。民族ノ種別ニ由

ラズシテ衆均シク之ニ屬ス。蓋衆人同シク天ノ父ノ子ニシテ、互ニ兄弟ナリ。此ノ我ガ郷國ハ主神ガ建テシ所ノ教會ナリ。我等皆均シク其會員タルヲ以テ、共ニ天ノ父ノ一ノ家族ヲ爲ス。此ニ緣リテ我今爾等兄弟姉妹ト別レズシテ、爾等ノ家族ヲ己ノ家族トシテ、其中ニ留マル。然ラバ我等ハ怠ラズシテ我ガ天ノ郷國ニ對スル本分ヲモ、各其屬スル所ニ循ヒテ共ニ盡スベシ。我常ノ如ク教會ノ爲ニ禱リ、教會ノ諸務ヲ行ヒ、奉事ノ經典ヲ譯スルコトヲ務メン。爾等ハ、諸司祭ヨ、慎ミテ神ヨリ爾等ニ託セラレタル靈智ノ羊群ヲ牧セヨ。爾等ハ、諸傳教者ヨ、虔誠ヲ以テ未ダ眞神タル天ノ父ヲ承ケ認メザル者ニ福音ヲ傳ヘヨ。衆信者、或ハ平安ニシテ家ニ在リ、或ハ戦役ニ服スル者ヨ、皆信ニ生長シテ之ヲ堅固ニシ、ハリスティアニンノ諸徳ニ進歩セヨ。且我等皆共ニ熱切ニ祈リテ、主神ガ已ニ斷絶セシ平和ヲ速ニ克復セシメ給ハンコトヲ求ムベシ。

願ハクハ我ガ主イエススハリストスノ恩神父ノ慈聖神ノ親ハ爾  
衆人ト借ニ在ランコトヲアミン。

明治三十七年二月十一日

大日本國ハリストス正教會エビスコブ ニコライ

以上の公開狀を一讀せば、ニコライが平素信徒に教訓する所の主義主張自ら明かなる者ありて、戰爭に對する彼の見解も亦窺知するに足る可し。彼は唯り公開狀を以て、日本の信徒に國民の本分を教訓したるのみならず、實行を以て其本分を盡さん事を勧め、信徒をして國家に對する諸種の事業を計畫せしめたり。日本全國の正教信徒は尠からざる恤兵義捐金を募集して恤兵部に献じ、又正教神學校の教師生徒は軍用日露會話を編纂印刷し、八千部を陸軍省に献納せり。然るに開戰の當初に、露國の皇帝は教會の首領をれば、日本正教會の信徒も亦露國皇帝を首領に戴く者なる可しとの譏誣の言を爲す者あり

しかば、ニコライは全國信徒に再び公開狀を發して、此の説の無根なる事を證明せり。其公開狀は即ち左の如し。

大日本國ノ神聖ナルハリストス正教會ノ信徒ニ書ヲ達ス。  
至愛ナル兄弟姉妹ヨ、我ガ二月十一日ヲ以テ達セシ所ノ公書ニ對シテ、各地ノ諸教會ハ復翰ヲ寄セテ、我ガ現今ノ戰時ニ於テ斯ノ地ニ留マレルニ因リテ欣慰ノ情ヲ致セリ。我ガ信徒ノ此ノ懇誠ハ反響シテ、復我ヲ悦バシム。我之ニ因リテ我ガ彼等ニ於ケル愛ノ感應セザルナキヲ明ニ見タレバナリ。是レ我ガ神ノ事ノ爲ニ斯ノ地ニ在リテ聊勞セシ所ニ報ユル最善キ賞ナリ。  
兄弟等ノ書牘ノ中ニ我多ク左ノ言ヲ見タリ、戰爭ハ悲シムベキコトナリト雖、正教會ノ爲ニハ是ヨリ亦少カラザル益ハ生ゼン、即日本ノ正教信徒ニ對スル凡俗ノ迷謬ナル思想ハ矯正セラルルアラント我モ亦確ニ之ヲ信ズ、戰爭ハ必斯ノ善果ヲ致サン。此ノ迷謬ナル思想ハ

何ゾ衆クノ者ハ爾等ノ事ニ關シテ是クノ如ク言フ正教ノ信徒ハ露  
 西亞ノ皇帝ニ繫屬スル所アリ彼ハ正教會ノ首ナレバナリト之ニ因  
 リテ彼等ハ爾等ガ己ノ皇帝及ビ國家ニ盡スベキ忠節ヲ疑フ是レ正  
 教會ニ關シテ如何ニ驚クベキ虚偽ノ思想ゾ又是ヨリ生ズル迷謬ハ  
 爾等ニ對シテ如何ニ懼ルベキ疑ゾ夫レ露西亞ノ皇帝ハ決シテ教會  
 ノ首ニアラズ教會ノ惟一ノ首ハ主イエイススハリストスナリ  
 (一ノ十八)正教會ハ其授ケシ所ノ教ヲ純全ニ崇奉シ而シテ露西亞ノ皇  
 帝ハ斯ノ教ヲ守ルニ於テ教會ノ敬神ノ子タルノミ他ノ一般ノ正教  
 信徒ノ如シ教會ハ何ノ時ニモ何ノ處ニモ教法ニ關シテ何等ノ權ヲ  
 モ彼ニ授ケザリキ又彼ヲ以テ己ノ首ト承認セザリキ其名稱ヲモ彼  
 ニ與ヘザリキ彼ガ教會ニ首タリトノ迷想ハ初西歐ニ其露西亞ノ教  
 會ヲ知ラザルニ因リテ起リ彼處ヨリ日本ニ移リテ彼ノ地ニ於ケル  
 ガ如ク傳播セリ若シ其基虚偽ナラバ况ヤ此ノ上ニ造ラレシ者ヲヤ

露西亞ノ皇帝ハ露西亞ノ信徒ノ爲ニスラ教會ノ首ニアラズバ彼豈  
 爾等ノ爲ニ首タランヤ爾等ノ爲ニハ彼ハ信教ニ於テ爾等ノ兄弟ノ  
 ミ恰モ爾等同教ナル露西亞ノ一般ノ信徒ノ如シ露西亞ノ皇帝ハ  
 爾等ニ對シテ影ダニモ信教ニ關スル權ヲ有セズ爾等ガ己ノ皇帝及  
 ビ國家ノ爲ニ竭スベキ忠節ヲ秋毫モ妨グズ露西亞ノ皇帝ハ信教ニ  
 於テ爾等ノ兄弟トシテ言フマデモナク爾等ガ唯善良ノ信徒ト爲ラ  
 ンコト即信者ノ一切ノ本分ヲ行ヒ其中ニ爾等ノ皇帝及ビ國家ニ竭  
 スベキ忠節ヲ守ランコトヲ望ムノミ此等ノ眞理ハ爾等ガ初メテ信  
 者トナリシ時ヨリ常ニ知レル所ナリ此ニ反スル事ハ爾等未嘗テ其  
 傳教者或ハ司祭等ヨリ聽カザリキ彼等モ亦己ノ職務ノ爲ニ教會ノ  
 學校ニ教育セラルル時此等ノ眞理ニ反スルコトヲ其教師等ヨリ聞  
 カザリキ又定理神學教會法學等ノ教科書或ハ他ノ諸書ニ於テモ之  
 ヲ見ザリキ然レドモ正教ノ教理ヲ知ラズ或ハ知ランコトヲ欲セザ

ル者ハ亦右ノ真理ヲモ知ラズ故ニ爾等ニ關シテ迷謬ナル思想ヲ懷  
 キ且之ヲ公言ス我等ハ此ノ迷謬ヲ解カシ爲ニ言明シ或ハ筆述セシ  
 コト幾何ゾ此ノ迷謬ヲ解説セシ爲ニ書籍ヲ刊行セシコト幾卷ゾ然  
 レドモ我等ノ勞力ハ恰モ空手ヲ以テ巖石ヲ打ツガ如クナリキ視ヨ  
 今斯ノ巖石ノ破碎シテ粉散スル時ハ至レリ露西亞ト戰端ノ開クル  
 ヤ日本ノ正教信徒ハ各地ノ教會ニ於テ自國ノ皇軍ニ勝利ヲ賜ハン  
 コトヲ祈禱ス忠實ノ情ヲ以テ同教ノ軍士ヲ戰地ニ送リテ其勇武ヲ  
 以テ國家ノ爲ニ戰ハンコトヲ確信ス軍士ハ己ノ司祭等ニ祈禱祝福  
 ヲ請ヒテ決死ノ志ヲ立テテ進發ス正教ノ神學校ハ同胞軍隊ノ爲ニ  
 日露軍用會話ヲ作りテ萬餘冊ヲ陸海軍ニ獻納ス之ヲ印刷スル爲ニ  
 ハ貧困ナル學生ニ至ルマデ其資ヲ助ク正教ノ女學校ハ教員中ヨリ  
 數名ヲ出シテ傷病兵ノ爲ニ矜恤ノ勞ヲ執ランコトヲ請フ全國ノ衆  
 正教信徒ハ各其分ニ應ジテ欣然トシテ恤兵ノ爲ニ其資財ヲ投ズ然

ラバ正教ガ國家ニ於ケル忠誠ノ情ヲ妨ゲザルハ炳焉トシテ日星ヨ  
 リモ明ナルニアラズヤ雷之ヲ妨ゲザルノミナラズ更ニ斯ノ情ヲ聖  
 ニシテ崇高堅固ナラシム若シ何人カ正教信徒ノ斯クノ若キ行爲ヲ  
 見タル後ニモ猶且彼等ニ對シテ迷謬ヲ解カズバ我等慨歎シテ眞理  
 ヲ強ヒテ拒ム者ハ之ヲ信服セシムル法ナシト言ハンノミ想フニ此  
 クノ如キ輩ハ多クアルニアラズ然レドモ今ニ至ルマデ聊モ正教ノ  
 如何ナル者タルカヲ知ル便宜ヲ得ズシテ之ヲ譏誣セシ者ハ今ヨリ  
 之ニ目ヲ啓キテ同情ヲ以テ之ヲ見ン  
 然ラバ至愛ナル兄弟姉妹ヨ信ニ堅ク立チテ斯ノ試誘ノ日ニ於テ各  
 其忠誠ヲ竭シテ國家ノ爲ニ勤勞セヨ又信者ノ一切ノ本分ヲ守リテ  
 爾等ニ因リテ神ノ名ハ聖ニセラレ天ノ父ニ光榮ノ歸セラルルヲ致  
 セ且倦マズ禱リテ主神ガ戰ノ日ヲ短クシテ平和ヲ克復センコトヲ  
 求メヨ

願ハクハ神ノ祝福ハ爾等衆人ニ在ランコトヲ願ハクハ又ハリスト  
スノ眞ノ福音ノ光ハ速ニ爾等ノ全國ヲ照サンコトヲアミン。

明治三十七年三月十三日

大日本國ハリストス正教會エビスコブ ニコライ

斯の如く日本の正教會は日本國の教會なれば、外國皇帝の管轄を受く可きものに非ずといふは、是れニコライ主教傳道の精神にして、彼が畢生の大希望は日本の正教會をして、將來全く露國の傳道會社より關係を絶ちて獨立せしむるに在り。

されば彼が傳道の方針は、成る可く露國の關係を薄からしめんとするに在りて、其教會の傳道者牧師等悉く皆日本人のみを用ひ、外國宣教師は彼一人のみなり。彼が更に他の外國人の保助を得ず、獨力にて日本人のみを相手にして、殆んど三萬に近き信徒を得、二百有餘の教會を建て、今日の日本正教會あらしめたるの功は、日本の宗教史と文明史とに

特筆すべき偉業と謂ふ可し。



偉僧ニコライ終

明治三十七年九月十七日印刷  
明治三十七年九月二十日發行

郵定價四貳拾錢

著者 中川愛氷

發行者 中川藤四郎  
東京市京橋區竹川町十五番地

印刷者 天野勝彦  
東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社  
東京市神田區檜樂町二十五番地

發賣所 中庸堂  
京都市三條通寺町上ル

發賣所 植村吉次郎  
京都市東區南久太町四丁目

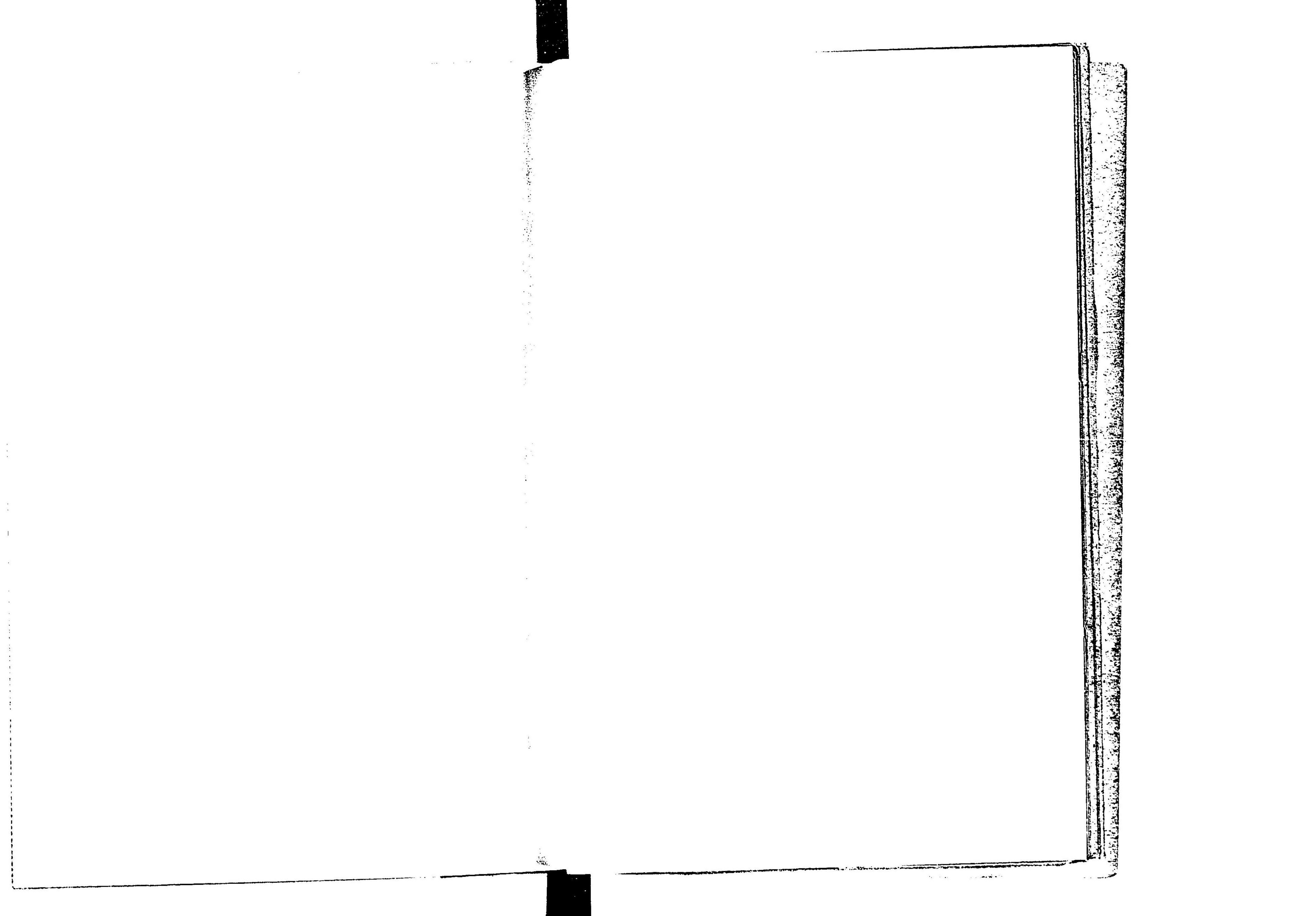
發賣所 矢部外次郎

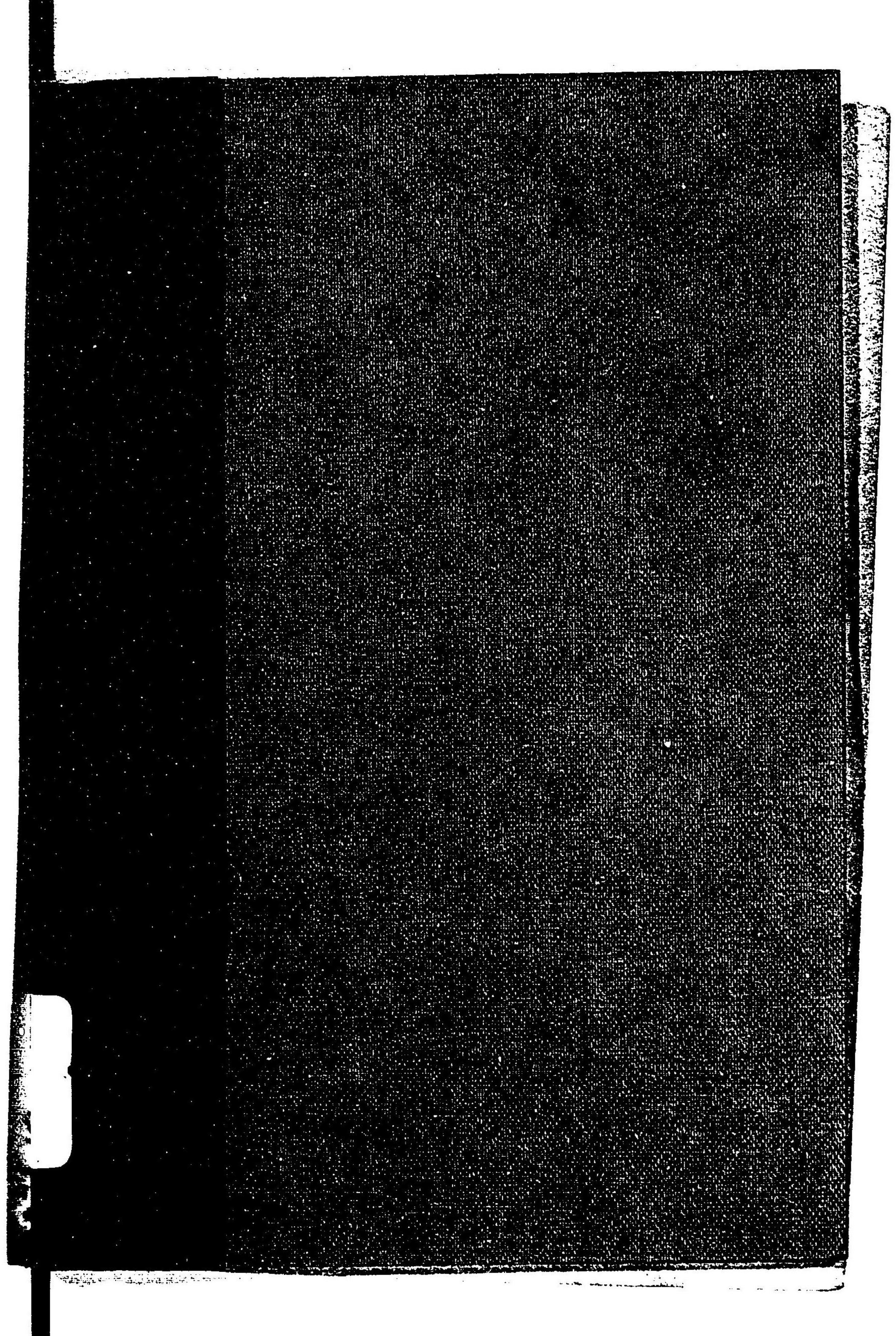
復製  
不許

94
222



212K26





97

222

020246-000-2

97-222

偉僧ニコライ

中川 愛氷/著

M37

ABI-0049



